

## 国際協力特別賞

### 受け継いでいきたい考え方

飯田市立鼎中学校 3年

永井 匠海

僕には夢がある。いつか日本を出て世界中を旅していろんな人や文化に触れたいという夢だ。

僕の父は世間一般的に少し変わっているらしいが、僕には自慢の父だ。そんな父と小さな頃動物園に行くと、

「この動物はおいしい。この動物は食べられないこともないけど余りおいしくない。」

と教えてくれた。だから僕も初めていく動物園で目新しい動物を見ると、いつの間にか

「ねえ、お父さん。この動物はおいしい？」

そう当たり前のように父に質問していた。父はその度に自分の経験から話をしてくれた。母はそんな僕たち二人の会話を聞くと

「普通、動物園ですのような話じゃないから、友達と来たときは、そういう話はやめなさいね。」

そう心配そうに諭してくれた。当時はよく分からなかったが、今にして思えば母の心配する気持ちもよく分かる。父は昔、青年海外協力隊の隊員としてパラグアイで二年間ボランティア活動をしていた。その時の経験からしてくれた父なりの食育だったのだ。

僕が少し大きくなり、小学生になった頃、家族で父が協力隊で参加していた時の話をしたことがある。その話で、父がパラグアイで初めて住んだ家は、電気が無いだけでなく壁もちゃんと無くて、蛇がよく天井から落ちてきたこと。異国の地で初めてぎっくり腰になり、村民から祈祷師を呼ばれたが治らなくて、病院のある町まで治療に行くことになったら、その車に村民が乗りこんできて、腰の痛い父は手で腰を浮かせながらの移動になったことなどが印象に残っている。水道も電気もきていない村で、現地の人と一緒に生活をしながら、活動していたころの父の写真を見ると、どれもその場所に溶け込んでいた。しかし異文化の中で違いに苦しみながらも、自分のできることは何か、何をしたら状況は良くなるかと、一生懸命考え行動していたことは想像できる。パラグアイの田舎では当たり前には食べられているアルマジロも、日本では決して食べることはない。もし日本でアルマジロを食べたいと言ったらきっと大勢の人が可哀相と言うだろう。でもそれが文化の違いなのだ。ここで大切なのは文化の違いだとお互いに認めることだ。食だけでなく宗教や考え方、生活方法も場所や環境が変わると違いがある。父のように相手の文化に触れ、違いを受け入れるには、相手を尊重する気持ちが大切だ。そのため

にも自分をよく知り、相手にも自分のことを伝える努力をしていかなければならない。

父は自分の国の文化や歴史に誇りを持ち、自分についてもよく理解し、相手を尊重することもできる。僕はそんな考え方を受け継いでいつか世界の文化に触れるとき、違いを認められる人になりたい。そうすることが自分を幸せにし、世界の幸せのために僕ができることだと思う。